

10 掛けあいのワザ2 アンティフォン (2021、11月)

## 奉神礼基礎講座 10 実技編「掛け合いのワザ」 2. アンティフォン

### Slide1

第10回奉神礼基礎講座、実技編を始めます。今回は「掛け合いのワザ」の第2回、アンティフォンです。

### Slide2

アンティフォン、日本語で「倡和詞」「交唱」などと訳されますが、アンティ・フォン、「音対音」の意味で、右、左に分かれて交互に歌う「歌い方」を指します。シンプルな形は、前回ご紹介した「連祷」に代表される、応答唱、リーダーが「呼びかけて」聖歌隊に支えられた信徒が「応える」コール&レスポンスです。それを左右2隊にして複雑にしたのがアンティフォンです。それぞれにリーダー、聖歌隊、会衆がいます。

### Slide3

9月の「正教聖歌の伝統」シリーズの「お名前、トロパリ」の回でもご紹介しましたが、アンティフォンは街中の大通りを二隊で、掛け合いで歌いながら、行進する時の歌い方でした。時々広場で止まって連祷を祈りました。アンティフォン行列と連祷はビザンティンの街の教会の奉神礼の特徴です。昔の聖体礼儀は「聖入」、聖堂に入るところから始まり、すぐに聖書の読みでした。屋外の行列行進の部分が、後に聖体礼儀に取り込まれて屋内で歌われるようになりました。

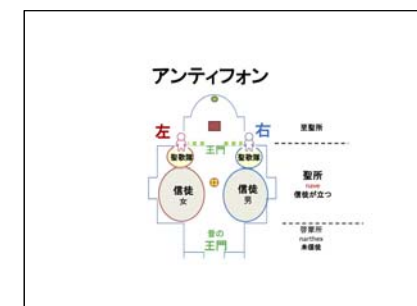
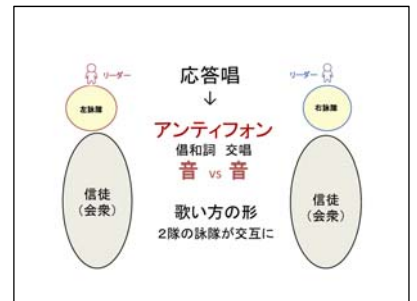
### Slide4

今は、イコノスタス中央の門が王門と呼ばれて、聖職者が王門から至聖所に入って行く動きが「聖入」と呼ばれますが、「小聖入」はもともと聖堂の中に入る動きで、聖堂正面の門が皇帝と総主教専用で王門と呼ばれました。ちなみにギリシア教会では今も、聖堂正面の門が王門と呼ばれ、イコノスタスの門は「美しい門」と呼ばれます。聖歌隊の定位置はイコノスタスのすぐ手前、両側です。右と左に分かれて立ち、左右掛け合いで歌い、最後は両隊が中央に寄って一緒に歌いました。聖堂の中央の赤絨毯のラインは空けますから、信徒もその後ろに左右に分かれて立ちます。ロシアなど古い習慣の残る教会では、右に男性、左に女性が立つことが多いですね。

### Slide5

実際に歌っている映像をご紹介します。古代奉神礼の研究者に教えてもらいました。ロシアの古儀式派の教会の映像です。古儀式派というのはニーコンの奉神礼改革を拒否して、古い伝統を守り続けきた教会です。いまやギリシアでも失われてしまった古い伝統がたくさん残っているそうです。

ここではパスハのスティヒラ「神は興き」をアンティフォンで歌っています。歌の種類としては「スティヒラ」、歌い方はアンティフォンです。ビデオは横から録っていますから、左が至聖所で、真ん中の絨毯をはさんで、奥が右聖歌隊、この場合は右が男声、手前が左が女声です。



Slide 6

歌い方、右のリーダー、ここでは全体のリーダーを兼ねています。「神は起き」と歌い始め、続いて右の聖歌隊、男声が、句の後半「その仇は散るべし」と引き継いで、「聖なるパスハ・・・」以下のスティヒラを続けて歌います。

次は、リーダーが次の句「煙の散るが如く」を歌い、左の聖歌隊女性聖歌隊が「爾彼らを散らし給え」、続いて2つめのスティヒラ「福音を伝ふる女たち・・・」を歌います。こうして交互に歌っていきます。

Video 古儀式派



Slide 7

最後の部分は両方の聖歌隊が、聖堂の中央に集まって全体で歌います。リーダーが「光栄は父と子と聖神に帰す」と唱え、聖歌隊が「今も何時も世々にアミン」と最後のスティヒラ「復活の日」を歌って、パスハのトロパリ「ハリストス死より」を3回歌います。



これが古いアンティフォンの歌い方でした。

Slide 8

ビザンティンの行列のアンティフォンの名残があるのが、主宰の祭日、つまり復活祭、聖枝祭、昇天祭、五旬祭、変容祭、十字架挙栄祭、降誕祭、神現祭の、冒頭の3つのアンティフォンです。第一アンティフォンに「救世主や、生神女の祈祷に因って・・・」が繰り返されるものです。



Slide 9

楽譜では、ずらざらっと続けて書かれているのでわかりにくいですが、これは神現祭ですが、リーダーの聖歌者がソロで歌った聖詠の部分と会衆が歌う「救世主よ、生神女の祈祷に因りて我等を救ひ給へ」というリフレイン（繰り返し）の部分に分解できます。



Slide 10

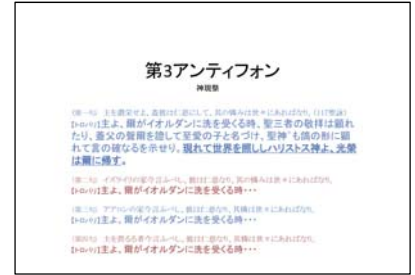
取り出し書くと、専門家のソロの聖歌者と会衆の応答だった構成がよくわかります。昔は書かれたものは貴重だったので、聖歌者とは聖詠を覚えていることがポイントでした。聖歌者は聖詠を暗記して歌える人でした。一般の会衆は聖詠は覚えていないので、短いリフレインを聞いて、そこだけ歌います。会衆参加の工夫です。これを、さらに、右グループ、左グループに分けて、掛け合いで行うのがアンティフォンです。第2アンティフォンも同様です。リフレインが祭日ごとに異なり「イオルダンに洗を受けし神の子よ、我等爾にアレルイヤを歌う者を救ひ給え」になります。



Slide11

第3アンティフォンは日本ではトロパリだけを2-3回繰り返して歌っていますが、本当はこの間にソロで歌う聖詠の句があり、聖詠の間にトロパリを挟みます。トロパリはみんなで歌うんですが、トロパリが長くて、会衆が覚えきれない場合は、最後の1行、この場合だと「現れて世界を照ししハリストス神よ、光榮は爾に帰す」だけを一緒に歌います。本当によく配慮されていると思います。

この図だと赤の部分、青の部分、それぞれにリーダーと聖歌隊、会衆が交互に掛け合いで歌いました。



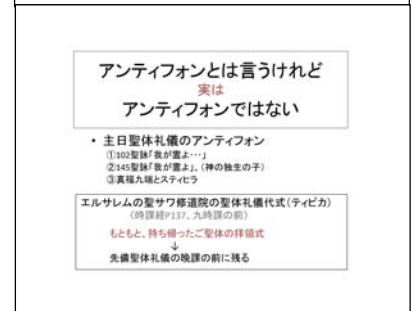
Slide12

日本だと聖歌隊が2隊に分かれて歌うことはあまりないですが、ギリシアでは聖歌隊の場所は1カ所でも、2組に分けて歌っているのをよく見かけました。



Slide13

ところで、みなさん、アンティフォンという思い浮かべるのは主日聖体礼儀の始まりのアンティフォンだと思います。第1アンティフォンは「我が霊よ、主をほめ上げよ」で始まる102聖詠の抜粋、第2アンティフォンはやはり「我が霊よ、主をほめ上げよ」で始まる145聖詠の抜粋。これは2本では省略されていることが多いですね。「神の独生の子」をはさんで、第3アンティフォンに「真福九端」が歌われます。この三つのアンティフォン、アンティフォンとは呼ばれているけれど、実は、厳密な意味でアンティフォンではありません。



以前に、正教会の奉神礼は街の大聖堂の方式と修道院の方式の合体、ハイブリッドだと申し上げましたが、まさにこれがそれで、コンスタンティノーブルの街の大聖堂でアンティフォンが歌われていた場所に、エルサレムの聖サワ修道院で行われていた、修道院に持ち帰ったご聖体を頂くときの領聖式が合体したものです。聖サワ修道院で、102、145聖詠と真福九端が歌われていました。ロシア教会ではこちらのエルサレム式が広く用いられるようになりました。なので歌い方としてはアンティフォンではないけれど、もともとアンティフォンの場所で歌われるのでアンティフォンと呼ばれています。

ギリシアでは日曜日でもビザンティン式、「救世主や〜」という、行列の歌い方、私たちが主宰の祭日に使っている歌い方で行われます。

Slide14

だからこれは聖詠唱でアンティフォンではないんですが、ロシアの修道院ではアンティフォン、掛け合いで歌われていました。祈祷書を見ると、確かに右、左の区別が書いてあります。これが出ている祈祷書は「イルモロギ」連接歌集です。イルモロギは聖歌者のた



めのイルモス集ですが、ほかに、聖体礼儀や晩禱の歌の歌詞がきちんと載っているのではとても役に立つ、優れたものです。教会になれば、是非、教団から頂いてください。

その188ページに第一アンティフォンの歌詞と、右、左の区別が載っています。

この歌はもともと聖詠の読みだけけれど、アンティフォンの場所だから、アンティフォン風に歌います。修道院では抜粋ではなく、全文が歌われます。

お聴き頂くのは2008年に巡礼団として行った至聖三者修道院至聖三者聖堂の早朝の聖体礼儀です。場所は右左には分かれていなかったけれど2組に分かれて交互に歌っています。

♪至聖三者修道院至聖三者聖堂聖体礼儀録音

Slide15

じゃあ、私たちも、アンティフォン風にやってみましょう。

これを真似してこんな歌い方もできます。掛け合いにすると、緊張感がでるので、面白いと思います。ロシアで、掛け合いでやっているのを見ると、互いに「俺たちの方がうまいぞ」という感じで、張り合っていて、それがまた活動的な感じを出していて、楽しいです。やってみますね。ゲオルギイ神父とやってみますね。

歌わない方が「ド」の音を延ばして、通奏低音風になると正教会っぽくできます。

Slide16

同様に、真福九端も1行ずつ、掛け合いでうたってみます。最初と一緒に歌います。

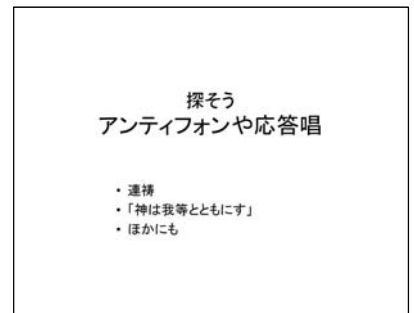
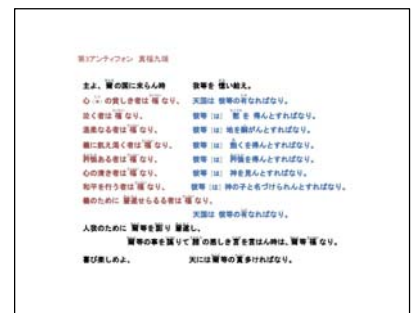
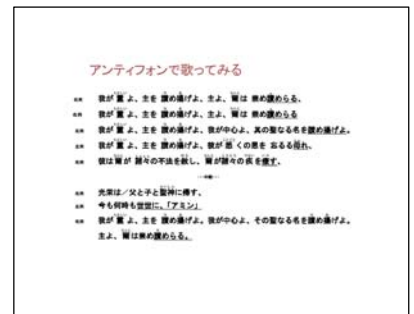
こうして歌って、最後の「喜び楽しみよ」は全員で歌います。

Slide17

あるいは、こんな掛け合いもいいかもしれません。投げかけて、応える歌い方です。最初と最後はみんなで歌って盛り上げます。

Slide18

応答もアンティフォンも教会が気持ちをひとつにして、歌うための工夫です。正教会にはたくさんあります。2隊で、アンティフォンを編成するのは難しくても、交替で歌うことなら割合簡単にできて楽しいです。特に、会衆の歌ったリフレインだけをみんなで歌うというのは使えます。簡単ですから、初心者の人、「歌の得意でない人」も参加できるという利点があります。古代の教会は一般の信者を置き去りにしないために色々工夫しました。正教の奉神礼がと







### Slide21

余談ですが、楽譜に書かれた詩を、リフレインとトロバリに分解して並べると面白い発見があります。パニヒダの「主や爾は崇め讃めらる」と主日早課の「主や爾は崇め讃めらる」は対になっています。

正教会の伝統では死者の祈りは土曜日の祈りです。土曜日に死者のために祈った歌が、日曜日には復活の歌となって歌われる。聖大土曜日、聖大スボタにハリストスが陰府に下り「死を以て死を滅ぼし」、日曜日に復活が宣言される。それが「同じ歌」であらわされています。正教の奉神礼はそういう図式が、体験的にわかるように組み立てられています。

今は日曜日しか集まれないから、日曜日にもパニヒダやりますが、本当は土曜日に死者、日曜日に復活というのが正教会の流れだということは知っていていいと思います。また、大斎中は土曜日に全死者の記憶が行われる教会も多いので、是非、参加して頂けると、死者の復活が実感としてわかると思います。

### Slide22

ほかにも、応答の形が埋もれているのを探してみましょう。早課の「主は神なり」や「アリルイヤ」があります。

### Slide23

本来は応答で交互に歌う形です。18世紀19世紀のロシアの習慣で、「主は神なり我等を照らせり」から4つの句を全部続けて輔祭が読み、聖歌隊が「主は神なり我等を照らせり」を3回、重ねて歌うという方法がとられています。

当時ロシアでは、伝統の形を崩しても西洋風の美しい合唱音楽を聞かせることに熱心で、掛け合いの応答、繰り返しの回数を減らして、美しい合唱を聴かせる構成にしました。そのため、日本では「主は神なり」や「アリルイヤ」は3回歌うものと受けとられています。近年ロシアでは、失われた正教伝統の形、伝統に本来あるバイタリティをとりもどそうという傾向が強くなっています。言い方悪いですが、日本はいわばガラパゴス現象で、明治期にいただいた革命前のロシアの習慣が残って閉まっていて、外国から来られた方に、「今でもそんなことやってるの」と言われたこともあります。「歌い方」や「音楽」には工夫の余地がたくさんあります。

### Slide24

最後に、今まで、簡単にすることをお話ししてきましたが、逆に複雑にすることも可能です。たとえばポロキメン。1回目を右、2回目を左、3回目を両方でという歌い方もできます。男声と女声で分けてもいいですね。

### Slide25

それから祭日のポロキメンは「まっすぐで書かれていること」が多いですが、ちょっとメロディをつけると華やかにできます。たとえば降誕祭の晩禱、早課のポロキメン。「我黎明の前に腹より爾を

**埋もれている  
アンティフォンや応答唱**

ほかにも

- ・ 主は神なり…
- ・ アリルイヤ(パニヒダなど)

**主は神なり、主日トロバリ 1調**

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。  
主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。

【第1句】主を讃め讃めよ、爾は仁徳にして其徳は世世にあらばなり。  
♪主は神なり、我等を主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。  
【第2句】我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。  
♪主は神なり、我等を主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。  
【第3句】我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。  
♪主は神なり、我等を主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。  
【第4句】工部が建てし所の石は鐘の音となり、主の名を以て我等の日に  
奇異なりとす。  
♪トロバリ「救世主や、イウヂヤの人墓を刺じて…」

**まっすぐ→調のメロディで**

【降誕祭早課のポロキメン】  
**我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓ひて悔いず。**  
♪ 主我が主に誓へり、爾我が右に坐して、我が爾の脚を置の足  
の台と為すに應れ。  
A   
我黎明の前に腹より爾を生めり 主は誓ひて悔いず  
B   
我黎明の前に腹より爾を生めり 主は誓ひて悔いず

**まっすぐ→調のメロディで**

【降誕祭早課のポロキメン】  
**我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓ひて悔いず。**  
♪ 主我が主に誓へり、爾我が右に坐して、我が爾の脚を置の足  
の台と為すに應れ。  
A   
我黎明の前に腹より爾を生めり 主は誓ひて悔いず  
B   
我黎明の前に腹より爾を生めり 主は誓ひて悔いず

10 掛けあいのワザ2 アンティフォン (2021、11月)

生めり、主は誓ひて悔いず」。もちろん、まっすぐでもかまわないのですが、3回目の「くいーず」というのが、前からずっと気になっていました。クイズって何？

まっすぐでも少なくとも「主は誓いて悔いず」というふうに歌うと、少し日本語らしくなる。あるいはメロディをあてはめて、こんな風にもできます。ズナメニイの4調です。

もっと華やかにするなら、ハーモニーつければいいし、誦経者もまっすぐじゃなくて、メロディつけて歌うこともできます。ただ、しっかり練習してからにしてください。「笑い」を取ることで困るので。

### Slide26

正教会の伝統というのはとてもフレキシブルです。簡単にも複雑にもできます。伝統のワザにはいろいろな知恵があります。それを探して、生かしてみよう、というのがこの講座の趣旨です。やってみてください。

今回は青のシリーズ「正教聖歌の伝統」で、「聖歌のお名前」の2、コンダクを取り上げます。コンダクは6世紀ぐらいに流行った聖歌のスタイルです。その代表者は聖歌者ロマン。聖歌者ロマンの代表作が降誕祭のコンダク。元々の歌は生神女マリアと博士たちの会話で物語が進む、壮大な物語。ご期待ください。

正教オンライン講座

お名前のお話も解く

正教神学礼拝 聖歌のリンクを探る

## 正教聖歌の伝統

第6回 聖歌の「名前」の由来2  
コンダク—6世紀の物語説教

講師 マリア松島純子